

第 67 回 日本生殖医学会学術講演会

0-215

横浜, 2022. 11. 03-04

当院での社会的適応における卵子凍結の現状

宮本 有希¹、佐藤 学^{1,2}、森本 義晴¹

¹医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

²医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

【目的】近年、女性の社会進出により多様なライフスタイルが増え、社会的適応における卵子凍結の需要が高まっている。当院でも年々増加傾向にあるため、その現状について報告する。

【対象と方法】インフォームド・コンセントを得た後、2016年1月から2021年12月に採卵をおこない社会的適応の卵子凍結を実施した102症例153周期を対象とした。初回凍結時の年齢を元に39歳以下をA群(57症例84周期)、40歳以上をB群(45症例69周期)とし、採卵数、総採卵回数、総凍結個数、初診から凍結完了までの期間、パートナーの有無、融解した症例の割合、融解後生存率について調べた。

【結果】A群, B群の結果はそれぞれ、採卵数 9.3 ± 6.2 個, 8.4 ± 6.3 個、総採卵回数 1.5 ± 0.7 回, 1.6 ± 0.9 回、総凍結個数 13.6 ± 8.2 個, 13 個 ± 9.3 個、初診から凍結完了までの期間 152 ± 138 日, 133 ± 111 日、パートナーを有する割合26.3%, 37.8%、融解した症例の割合7.0%, 8.9%、融解後生存率90.5%(19/21), 85.5%(47/55)であった。融解した症例のうち、初回凍結時にパートナーを有していたのはA群0%(0/4)、B群100%(4/4)であった。

【結論】B群でより初診から短期に保管を完了している。融解後の生存率から、今後の経過次第ではあるが凍結数を増やす紹介も必要と考えられる。

パートナーの有無に関わらずA, B群共に融解率が低かった。パートナーを有していても、今後結婚するか未定の為将来に可能性を残したいとの希望が大多数であった為と考えられるが、早めの利用を促す必要があると考えられた。

また、主に医療関係者の知人や主治医等からの紹介を元に説明会を受けて現状を初めて知るという方が多く、より一般的に現状を知ってもらうための取り組みが必要であると考えられた。